

熟柿庵たより



浄土真宗西福寺別院 熟柿庵
令和七年一月 第百三十九号

新年も早や一月半ば、いかがお過ごしでしょうか。

私は昨年暮れから、向田邦子さんと山田太一さんの隨筆を読んで過ごしました。お二人ともシナリオ作家で、テレビドラマの隆盛を作り上げた方です。そして何よりも、十代の多感な時に終戦を経験されています。

終戦というのは曖昧な言い方で、正確には敗戦です。さらに言えば、日本という国が、建国以来初めて、外国との戦争に負けたということです。

世間ではよく「教科書に墨を塗られた」とか都会から田舎へ疎開したということが話題になりますが、もつと深く日本人の心を変えたのではないか、という思いがします。愚かな戦争を始めてしまった大人に対する絶望的な不信と、そして焼け野原から新たな世界を作り出していくという可能性を秘めた解放感。最近、その世代の人々にとても魅力を感じています。しかし彼らは今、高齢化して、この世を去りつつあります。

向田邦子さん

すでに多くの愛読者がおられて、今さら新参の私が書くのがはばかられます
が、『ベストエッセイ』の中から一つだけご紹介します。

「手袋をさがす」

二十二歳の冬、手袋を買おうと思つていろいろ探したけれど、結局気に入つたものが見つからず、風邪までひくはめになつた。手袋なんかいろいろあるのだから妥協すればいいのだけれど、彼女はそれをしなかつた。父親に「若いうちは、可愛げがあるから周りも許してくれる。だが年取つたらその気性では苦労するぞ」と言われる。彼女は考えた末、その忠告を逆手にとつて、自分の欠点だけの頑固な性格のままに生きていこうと決意する。そして世間とギクシャクしながらも、そのような人生を生きてきた。結婚の話もあつたけれど、自分の、この性格では相手の男性を不幸にするだろうと思い、あきらめた。彼女は「精神の整形手術は無理」というしやれた言い方で自分を肯定しています。そのギクシャクの具体的な話がこの本には綴られています。

自らの性格を独特的の視線で細かに分析し、そしてそれを軽やかな文章に仕立てていく。彼女はやはりユニークな才能をもつていたのだなと思いました。昭和五十六年、取材先の台湾で飛行機事故に遭い、五十一歳の若さで亡くなりました。

生きるかなしみ

山田太一さんの本に『生きるかなしみ』というのがあります。これはアンソロジー形式になつていて、佐藤愛子さんや高史明さん、水上勉さん等の隨筆を編集したもので、巻頭に山田さんの文章が載っています。

佐藤愛子さん

百歳を超えて今もお元気ですが、ここには六十代半ばの頃の作品が掲載されています。まず世相への批判から始まります。「今は老いも若きも、ほとんどの日本人が人生は楽しむもの、楽しくなければならない」と思い込んでいるようである。それはまるで強迫観念になつてしまつたかのような観さえあり、国中に楽しみを得るための情報が氾濫している」と述べ、「今は身内のものが平和に楽しく暮らす権利を認めなければならぬから、老人はひたすら迷惑をかけることを怖れている」とおっしゃっています。

そしてご自分のことについて、「いかに自然に老い、自然にさからわずに死んでいけるか、いかに孤独に耐え、いかに上手に枯れていけるか、それがいちばんのテーマです。心に執著や欲望を燃やしたまま死ぬと、死後の魂は安らかではない」として最後に「楽しい老後など追及している暇は私にはない」と断言されています。

高史明（こさみよん）さん

在日朝鮮の作家で、十二歳の息子さんを自死で亡くされた辛い過去があります。ここでは、高さん自身の幼い頃の、父との葛藤が語られています。父は戦時中、強制連行によって日本に連れて来られ、日本語が話せない。一方、日本で生まれ育つた彼は日本語と片言の朝鮮語しか話せない。仕事で疲れ切つた父は、朝鮮語で息子に語ろうとするが理解されず、しだいに親子の間に会話が無くなり、「悲しい亀裂」が広がっていく。彼は日本語でしか物を考えられない自分を通して、自分はいつたい何者なのかを考え始める。

私が彼の存在を最初に知ったのは、親鸞聖人の『歎異抄』の勉強をしていた時でした。彼は『歎異抄』をとおして救われる道を求めた方でした。

水上勉さん

冒頭、「なぜ自分は、こんな家の、こんな父母に生まれたのだろう」という書き出しから始まっています。大正時代の初期、幼い頃の彼の家族は、極貧そのもので、自身も九歳で遠く離れた京都の寺に引き取られています。その頃のことを辿りながら、六十歳になつた今の自分のなかに、その当時の極貧生活のことが、「不思議に光のようなものとして私をとらえる」と語つておられます。

また、デンマークを訪れ、世界的な童話作家のアンデルセンが自分と同じような極貧の中で育つたことに思いを馳せています。

山田太一さんの巻頭の文

「本人も「多少強引に要約したきらいはあるけれど」と書いておられますが、生きるかなしみについて、次のように語つておられます。

「容貌も背丈も性別も選べない。民族も親族も才能も知力も体力も出生地も自由にはならないし、死期にしても早めに断念すればともかく、長びかせるには限度がある。癌やエイズを克服したからといって永遠に生きるものではない。仮に生きたとしても幸せかどうか分からぬ。」

自分でしたような気でいることも、多くは状況・構造の産物で、結局のところ、深層の無意識に支配されていて、確たる意志を貫いてくじけぬつもりが心身症というものが出て、肉体に裏切られてしまう。

災害の前にはひとたまりもなく、数日食糧が尽きれば起き上がるのもおぼつかない。交通事故などといわなくても指先の怪我ひとつでへとへとになってしまい、悪意中傷にも弱く、物欲性欲にふり回され、見苦しく自己顯示に走り、目先の栄誉を欲しがり、孤独に弱く、嫉妬深く、その上なんだかんだといいながら戦争をはじめて殺しあつてしまう。

生きるかなしみとは特別のことをいうのではない。人が生きていること、それだけでどんな生にもかなしみがつきまとう。」

「生きるかなしみ」と仏教

山田さんご自身は、信仰とは無縁な生活をしていると語つておられますが、彼が語る、生きていることのかなしみの中に、宗教への土壌があります。

信仰したからといって、そのかなしみは消えるわけではありません。だけどそのかなしみに包み込まれた命そのものは、本当は何ものにも妨げられない自由で自在な働きであると仏教は説いています。

生きるかなしみがなければ、宗教などというものは成り立ちません。

「信仰」という言葉は、盲目的に何かを信じることだというような、大きな誤解をされて人口に膾炙されているようですが、そのことに、いつも違和感を感じながら僧侶の生活をしております。

熟柿庵 東京都荒川区東日暮里五十九一四

電話 03-1560-4111三四

ホームページ <https://www.jyukushian.com>

令和七年の熟柿庵・行事予定

☆ 春・彼岸会法要

三月二十二日（土曜日）午前十時

☆ 盆会法要

七月十二日（土曜日）午前十時

☆ 秋・彼岸会法要

九月二十日（土曜日）午前十時

☆ 築地本願寺での合同法要

十一月六日（土曜日）正午